
雨音より静かな音の中で

dig

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨音より静かな音の中で

【Nコード】

N0646M

【作者名】

dig

【あらすじ】

季節があることが許せない。

流れる雨は、何も流してくれない。

そう何も。

秋から冬にかけて降る…通り雨を時雨という。

日本人は、風流を好む為か…季節ごとの雨に、名前をつけやがる。

五月雨とかさ…。

春夏秋冬。

移り変わる季節が、人々の心に変化を与え、飽きさせない。

そうだろうか。

季節なんて…なくてもいい。

季節があるから…変化があるから、思い出す。

ただ過ぎ去るだけなら、どんなに楽だろうか。

何度目かの…突然の時雨に濡らされて…俺はふと足を止めた。

この季節だったな。

人はあまりにも悲しいことは、忘れるらしい。

だけど、悔しさはどうなんだ。

後悔という悲しさは…。

激しい雨と乾いた音…薄暗い部屋と、確かだった鼓動の温もりとともに…俺は思い出す。

時雨の季節。

「お客さん…飲み過ぎですよ」

降り始めた雨から、逃げるようにして入ったバー。

薄暗い店内に、音数が少ないジャズが流れている。

（ああ…そっくりだ）

カウンターに頬をくっ付けて、目の前にあるグラスを見つめた。

透き通ってるくせに、ちゃんと味がある…ジンってやつに、俺は笑った。

顔を上げ、ロンググラスの中身を飲み干すと、俺はカウンターの向こうのマスターに、空のグラスを突き出した。

「お代わりを…」

にやっと愛想笑いを浮かべる俺に、マスターはため息をつき、

「大丈夫なんですか？」

腕を伸ばして、やっと届くカウンターの広さに、俺は思った。

（カウンターのようにな…壁があったのか？あんなに近かったのに）

俺は、マスターを見つめ、

「ああ…大丈夫」

マスターは、俺からグラスを受け取ると、

「ロックはやめて…トニックにしますか？」

「余計なものは、入れなくていい」

マスターの提案を、俺は断った。

余計なものは、いれなくていい。

余計なものは…。

強烈な痛みすら感じるジンの味を、舌が感じるたびに、俺は強烈に
思い出す。

痛みとは裏腹に、瞳に涙が滲んでくる。

俺は、コースターの上に、グラスを置くと、カウンターの向こうに
いるマスターに言った。

「かけてよ…。いつもの…」

マスターは頷き、カウンターの端に置いてあるレコードプレーヤーに、古びたレコードをのせ…針を落とした。

俺はそつと…目を閉じた。

閉じた反動で、少し涙が溢れ出た。

マスターは、プレーヤーのそばに、レコードジャケットを立て掛けた。

ジェリー・マリガン【ナイト・ライツ】

「この音だ…」

（同じ音を流す……違うもの）

俺は、ジャケットを見ながら、過去に沈んだ。

そう…もう過去だ。

激しく俺は、唇を押しつけた。

俺の下にいる愛しい女に…。

女は高揚しながらも、優しく微笑み…俺のすべてを受けとめてくれていた。

そう受けとめてくれては…いた。

初めての女…。初めて、好きになった人。

出会いは、覚えていない。

俺の記憶は、あの頃いつもにいた…小さなアパートの一室しかない。

日当たりの悪い…薄暗い六畳の部屋に、彼女だけ。

そして、部屋の片隅にあるレコードプレーヤーと…いつもかかっている…同じアルバム。

ジェリー・マリガンのナイト・ライツの音だけだ。

それ以外は覚えていない…。

いや、覚えている。

最初の頃の夢中さから、どんなに抱き締めても一つになれない切なさ、たった1人の女の上で、感じ始めた頃…俺は、いつも思い出していた。

「これ：ください」

アルバイトしていた中古レコード屋に、数日前から、1人の女が通っていた。

店長の性格もあり：レコードは、うちの店は、ジャンル別など整理されているわけではなく、何かほしいものがあっても、見つけることがなかなかできなかった。

店長いわく、レコードなんて買う奴がいなくなったから、どうでもいいと…。

店内の半分以上を占領しているレコードより、入り口近くに、丁寧に陳列されているCDが、メインだったからだ。さらに、配信なんて敵も外にいた。

そんな時代遅れになりかけた店に、女は何日も通い、一枚一枚レコードを物色していた。

数日後、やっと見つけたのか：笑顔で、レジにいた俺の前に持ってきたのが、ジェリー・マリガンナイト・ライツだった。

「CDでもあるけど：レコードがいいの」

部屋で、抱き疲れて仰向けになっている俺の横で、膝を抱えながら、煙草に火をつけた彼女は、そう呟くように言った。

吐き出した煙を見つめながら、薄い布団の上で、彼女は言った。

「前に持ってたのは…もう擦り切れて、聴けなくなったから…」

俺は質問ついでに、もう一つに訊いた。

どうして…うちの店で探していたのかと。

他にレコード屋はあるし、別にレアなものでもないし…。

彼女は笑いながら、

「このアルバムを置いてった人が、あそこで買ったのよ。だから…」

彼女は苦笑した。

中古なんて、そこで買ったから…またあるなんてものじゃない。

俺が驚きながら、そう言うとき…、

彼女はまた苦笑した。「なければ…なくてよかったの…。あっても、なくても」

そう言うとき、彼女は煙草を灰皿に置き、

隣で寝ている俺の唇に、倒れ込みながら、キスをした。

そして、俺を逆に抱いた。

「ねえーちいちゃん。×××のベスト、中古で買った」

教室の片隅で、佇んでいると、同級生の歩美が話し掛けてきた。

俺はそっぽを向きながら、こたえた。

「そんな新しいやつが、うちみたいなかび臭い店に、入荷するかよ」

俺は、馴れ馴れしい歩美が、苦手だった。

「そうなんだ…」

いきなり、シュンとなる歩美に、少し戸惑ったけど、俺は何も言わなかった。

歩美はため息をつき、

「あゝあ。安く買えると思ったのに…」

俺は、次の授業を告げるチャイムを聞きながら、

「世の中…そんなに甘くないってこと」

歩美に言うのと、自分のいつもの席に戻っていく。

ふと…いつもと変わらない自分の机に目がいった。

いつもと変わらない…いつもと同じ…場所にある机。

彼女を思い出した。

いつも…同じ部屋にいる彼女。

だから、俺は言った。

薄暗い部屋で、蹲る彼女に外へ出ようと。

「どこか、買い物でも行こうよ」

俺の言葉に、彼女はターンテーブルの上で回るレコードを見つめながら、首を横に振った。

「……ほしいもので、買えるものは、手に入ったし……」

そう言うと、彼女は俺の方を向いて、にっと歯を見せ、思い切りの笑顔を作った後、少し俯き、こう言った。

「抱いてよ…」

いつものように……。

何日か過ぎ……家にあった買い溜めがなくなったという理由で、彼女が部屋を出ていった。

いつも薄暗い部屋の布団の上にいるだけの俺は、何気なく……本当に何気なく、部屋の電気をつけた。

俺は……息ができなくなった。

壁一面に貼られた写真。

それは、男の写真だった。

男がいただろうことは……何となくわかっていた。

敢えて、きかなかった。

いや、きけなかったのだろう。

俺は明かりを消そうと、天井からぶら下がる紐に、手を伸ばした。

だけど、震えた手がなかなか……紐を掴めない。

あたふたしていると、後ろから彼女の声がした。

「別に……隠していたわけじゃないから……」

彼女は、買い物袋を置くと、中身を出しながら、

「やきもち焼きだったのよ。もし……この部屋に、男が来ても、変な気を起こさないように」

少し苛立つように言った。

確かに、写真の数が半端ではない。

この部屋で、どうこうしようとは、思わないだろう。

（…だけど、俺は…この部屋で何度も…）

啞然としてる俺を見て、彼女はこう言った。

「あたしのこと嫌いになった？いつまでも、未練がましく、死んだ男の写真を、ずっと貼ってる女なんか…」

「死んだ？」

「言ってなかったけ？」

驚き、思わず彼女の顔を見た俺を、意外そうに見る彼女がいた。

彼女は頭をかくと、布団の上に座り、

「半年前よ」

胡坐をかき、頬杖をした。そして、ジェリー・マリガンのレコードを見つめながら、

「病気だったの。だから、死ぬ数ヶ月前は、この部屋にずっといてね。働けないから…ここで、あたしの料理をつくり、あたしの帰りを待ち…あたしの為に、洗濯しを……」

彼女の瞳に、涙が溢れだす。

「そして…あたしの名前を呼びながら、死んでいったわ。奥さんがいたのにな」

彼女は笑った。

「別居中か何かでね。だから、あたしが最後を看取ったし、あたしが病院代も、葬式代も出したけど…。あの人は、結局…お骨になつてから、奥さんどこに戻った…」

彼女は笑い続け、

「向こうにとっちゃ…あたしなんて、ただの泥棒猫。あたしに残ったのは、写真と…レコード一枚。それも、擦り切れて…」

彼女は、ターンテーブルの上から、レコードを手に取り、

「今あるのは、別のもの…」

俺も、レコードを見た。

「同じ音を奏でる…別のもの」

自嘲気味に笑う彼女に、俺はかける言葉を、失った。

目の前が、真っ黒になり…彼女を見ていたが、見れていなかった。

意識はあり、考えているんだろが…頭が働いていない。

「千明ちゃん…」

女のような俺の名前を呼んだ彼女の声に、俺は現実に戻った。

「大好きだよ」

もう彼女の目に、涙はなく…まっすぐに、俺を見ていた。

なのに、俺は何も言えない。

「ずっと…この部屋から、動けなくなっていたあたしを…外に出れるようにしてくれたのは…千明ちゃんだよ」

彼女は立ち上がり、俺の首に両手を回すと引き寄せ、耳元で囁いた。

「今は…誰よりも、大好きだよ。これだけは、ほんと…だよ」

彼女は、近付けた顔を離し、

「でも、まだ…あの人を、嫌いには、なってないの」

彼女は、俺から離れ、

「まだ…忘れてもいないの…」

彼女は俯いた後、すぐに顔を上げ、微笑んだ。

「ずるいよね」

彼女の何とも言えない…悲しい表情に、俺は叫んだ。

「お、俺も！ご飯つくるし、俺も！お前の為に！生きるから…」

「だめだよ…」

彼女は笑い、

「それじゃ…千明ちゃんじゃなくなるよ」

首を横に振った。

その言葉に、俺は彼女に近寄り、思い切り抱き締めた。

彼女は目を瞑り、俺の背中を抱き、

「…………あたし、明日からアルバイトするね。知り合いの居酒屋が、
人手が足りないって…」

その日。

俺は初めて…彼女を抱けなかった。

どんなに抱き締めても、俺はたたなかつたのだ。

それから、数日。

ほんの数日。

学校やバイトが忙しくって、彼女に会えなかった。

抱けなかったことも気になって、俺はその日、堪らずにバイトを早出して、彼女の家に向かった。

そして、俺は信じられない光景を目にしたのだ。

彼女の家から、一人の男が出てくると、遭遇してしまったのだ。

男は、彼女と楽しそうに話をしながら出てきて、俺を見て、こう言った。

「弟さん？」

「え、ええ…」

少し引きつりながらも、笑顔でこたえた彼女の言葉より、俺は信じられないものを見て、唾然とした。

男を見送った後、俺と彼女は部屋に入った。

そして、彼女は口を開いた。

「……わかったでしょ？あたしと千明ちゃんは、恋人には、見えないのよ。あたしと千明ちゃんは…釣り合っていないのよ。千明ちゃん…もっと、あたしなんかより、若い女の子と…」

「あれ……誰だよ。今の男」

「……………バイト先のお客さんで」

「どうしてだよ……」

「仲良く……なったの」

彼女は、僕から顔を背けた。

「そ、そっくりじゃないか！死んだ彼氏と！」

電気がついていた部屋には、昔の彼氏の写真が一枚も、なくなっていた。

「外したんだ……………」

俺といるときは、外さなかったのに。

「千明ちゃん……」

「やったのか」

俺は怒りで、頭がおかしくなった。彼女を睨み、

「やったのか！あいつと！死んだ彼氏に似てるって、だけで！」

自分に激しく詰め寄る俺を見て：彼女は、悲しげに俺を見つめた後、俯き……そして、言った。

「やったわ」

彼女は唇を噛み締めた後、顔を上げ、真剣な表情で俺を見た。

「ど、どうして……」

俺の声が震えた。

「簡単なことよ」

彼女は笑った。

「千明ちゃんより、好きだから…抱かれただけ。淋しかったから…千明ちゃんに抱かれただけ……」

やがて、笑いは苦笑に変わり、

「それだけよ。あたしが、千明ちゃんといた…本当の理由は」

あれから……俺はどうしたのか……覚えていない。

いや、覚えている。

彼女を押し倒し…無理矢理抱いたのだ。

彼女はずっと、無表情だったが…俺が一度果てた後、じっと俺を見つめた。

そしてすぐに、今度は彼女から迫り…今までで一番激しく、俺を抱いてくれた。

俺は、そんな彼女を初めて知った。

その後…彼女と、会ってはいない。

その日…いきなり、降りだした激しい雨にうたれながら、俺はとぼとぼと家に帰った。

途中、歩美と会い…びしょ濡れの俺に驚き、傘に入れてくれた。

小さな傘であり、風も強かったこともあり、部活帰りの歩美のブラウスが、雨で透けているのに、気付いた。

(男って…ふられた直後でも…目がいくんだな…)

自分に笑ってしまった。

レコードが終わった。

マスターは、違うCDをかけた。

店内に、R & a m p ; Bが流れると、俺は店を出た。

「うん？」

すると、まだ雨が降っていた。

傘を持っていなかったが、普通に歩きだそうとする俺の前に、誰かが立った。

「はい」

傘を差し出す歩美に、俺は驚きの顔を向けた。

「また…この店だと思って…」

歩美から傘を受け取り、歩きだす俺に、

「そんなに好きなら、家で聴けばいいのに。CD持ってるでしょ」

歩美の質問に、僕は笑い、

「音が違う…レコードと。それにあの音は、薄暗いところが…似合っている」

「ふーん」

それ以上、歩美は訊かない。

俺は、普通の幸せを…手に入れた。

この季節……。

だけど、雨が降る日は…俺の心が、疼いた。

彼女が住んでいたアパート。数年後…大学生になってから、偶然前を通った。

忘れようとしていたが、近く来ると足が覚えていた。

しかし、アパートはうち壊されており、飲食ビルが建っていた。

その一階のバーで、偶然流れていたジェリー・マリガン。

俺は、あの部屋に貼ってあった…幸せそうな写真を思い出した。

そして、悔しさでいっぱいになった。

（俺はなぜ…彼女と一緒にいれなかったんだ！）

雨は、あの時の彼女の涙。

未だに、心濡らす涙。

忘れられない雨ともに流れ落ちても、まだ思い出す。

End。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0646m/>

雨音より静かな音の中で

2010年10月10日05時59分発行